

〔論文〕

人類の感染症とキリスト教芸術¹⁾

黒 柳 志 仁

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

「アフター・コロナ」という新時代を生き延びるために私たちはどうすれば良いのか。新型コロナウイルスが世界で広がる中、感染症と人類の関わりは、古代からの歴史がある。過去の歴史と比較して今を生きる現在を知り、人々は各時代に脅かされた感染症から何を学び、芸術を生み出してきたのか。本稿では絵画史と音楽史の始まりからバロック時代までを概観し、人類の感染症とキリスト教芸術との関わりを考察する。

キーワード：感染症，キリスト教，芸術

The Human infectious diseases and the Christian art

Yukihito KUROYANAGI

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

1) 本稿は、栄中日文化センターで行われた講座（2021年7月期）において執筆者が担当した『世界の時事問題と宗教』の資料を基に加筆修正したものである。

発行日 2022年10月31日

1. はじめに

新型コロナウイルスが世界で広がる中、感染症と人類の関わりは、思いのほか古代から歴史がある。原因も治療も十分に確立されていなかった時代、「感染症に対してどのような思想をもち、その暮らしに対応をする知恵を生み出していたのか」、これが本稿の問いである。人類史における感染症のパンデミックは、歴史を変えるほどの影響を及ぼしてきたといえる。そこで本稿では、人類と感染症との関わりを概観し、特に古代、ビザンティン、ロマネスク、ルネサンスという4つの美術史に生じたパンデミックとなった感染症について取り上げ、諸宗教やキリスト教の芸術に与えた影響について考察する。

1.1 人類と感染症の関わり

病原体を人類が初めて視覚的に確認したのは、1684年レーウェンフック（オランダ商人）の光学顕微鏡による細菌の観察が最初とされる。感染力のある病原体としての細菌の光学顕微鏡による観察は、1875年ローベルト・コッホ（ドイツ人医師）の炭疽菌の発見だった。日本の病原微生物研究の第一人者北里柴三郎氏は彼に師事し研究したことで知られる。つまり19世紀の本格的な細菌の研究に至るまで、感染症は人類にとって、得体の知れない原因不明な存在だったのである。

人は感染症の怖さを、1.症状の厳しさ、2.死亡率の高さから具体的に計測してきた²⁾。近代以前は、現代に比べ、感染した結果として3.死体の醜さから判断された。そして精神的には原因が4.可視的でないこと、5.得体の知れないことに起因する不安にあった³⁾。こうした怖さ（度合）が、古代からモチーフになり芸術や思想にも影響を与えた。

1.2 人類と感染症の歴史は狩猟採集から始まる——約20万年前

感染症は約20万年前、人類の祖先がアフリカで発生している。少人数の集団で狩猟採集を行いながら移動し、世界中に散らばった。この頃から人類と感染症の関わりがはじまる。獲物の肉や皮を通じて炭疽症（皮膚、肺、腸の感染症）やボツリヌス症（神経麻痺）などの感染症が生じ命を落とす者もいた。しかし狩猟時代では、感染症はパンデミック（流行病）を起こすほどの病ではなかった⁴⁾。

1.3 人類の「定住化」が感染症の原因——約1万3000年前

約1万3000年前（後期石器時代）に感染症との関係が劇的に変わったのは、人類が農耕文化の誕生と共にある。狩猟採集時代に比べ、狭い土地で多くの人が集落で生活できるようになり、定

2) 加藤重孝『人類の感染症の歴史』丸善出版2020年3頁参照。

3) 前掲書、3頁参照。

4) 神野正史『感染症と世界史』宝島社2020年16頁参照。

住化することで人口が増加した。現代に共通するこの生活スタイルの変化が、感染症を増加させた。

農耕文化によって、食糧の安定供給と、定住による出産間隔の短期化によって人口が増加する。狩猟採集時代は、出産間隔は平均4～5年であったのに対し、農耕定住社会では平均2年になった（移動には幼児が歩けるようになるまで次の出産ができなかった。農耕の維持には多くの人手必要だった）。定住化により集落には肥料として活用する排泄物が置かれるようになり、寄生虫病が蔓延する原因となり、余剰食糧が貯蔵されるようになり、ネズミを繁殖させノミ、ダニを媒介した感染症が広がり新たな「生活空間」が人から人への感染病の原因となったのである⁵⁾。

1.4 家畜との生活で結核菌の流行——約1万年前

約1万年前に、農耕文化と共に野生動物を「家畜化」する生活が始まり、家畜は肉や乳、卵などの食用の他、毛や皮の利用、畑を耕し、運搬の際に労働力として期待された。この頃に牛やヤギからの感染によって地中海東岸で流行したのが結核菌による感染症「結核」だった。2008年に東地中海イスラエル沖で、紀元前7000年の結核痕跡をもつ人骨が2体発見され、家畜のもつウイルスが共同生活に感染し集落内に広がったことが推定された。現在の研究で判明している限りでは、人の感染症の約70%が動物から入っている⁶⁾。

1.5 古代人類は感染症からどう生き延びたのか——「終生免疫」紀元前3500年頃

科学や医学が発達していない時代、感染症は恐ろしい「呪い」「魔術」として捉えられた。紀元前3500年頃、メソポタミア文明では農耕文化で人口が増え、集落が強大化する中で「麻疹」ウイルス（日本ではハシカ）が大流行した。動物から感染し、初期は発熱と咳、肺炎や脳炎、髄膜炎との合併症で多くの人々が死に至った。しかし繰り返し麻疹の流行があった地域では、次第に免疫をもつ人が増加。同地域内での感染規模が縮小した。この現象は麻疹ウイルスが根絶したわけではなく、各人が「免疫」をもち、新たに症状の出る者が出現しなかったのである。麻疹に一度感染すると身体の中にウイルスに対する抗体免疫ができ、その後も感染しなくなる「終生免疫」をもつ人々が生き延びたのである⁷⁾。メソポタミアは地域によって麻疹ウイルスは絶えず起こっていた。麻疹は大航海時代を経て、世界の隅々まで広がっていき大流行を及ぼした。

2. 美術年代と人類の感染症の関わり

人類史において感染症が流行した時代と、美術年代にはどのような影響があったのだろうか。美術年代から、諸宗教やキリスト教における各時代の芸術について概観する。

5) 石 弘之『感染症の世界史』角川文庫2020年74頁参照。

6) 加藤重孝『人類の感染症の歴史』丸善出版2020年167頁参照。

7) 神野正史『感染症と世界史』宝島社2020年21頁参照。

美術年代	広範囲な地域に及んだ感染症
紀元前3000年 古代エジプト	トキソプラズマ症 寄生虫トキソプラズマによる感染。動物から感染し胎内死亡、流産、網脈絡膜円、小眼球症、水頭症、小頭症、脳内石灰化像などを引き起こす。
6世紀 ビザンティン	ペスト クマネズミによる感染。長期の飢饉で栄養状態の悪化から人々の抵抗力が低下。東ローマ帝国を中心にイギリスまで広がり200年続いた。リンパ腺の腫れ、皮膚に斑点が出る。
11世紀 ロマネスク	ハンセン病 熱帯の風土病が十字軍の移動でヨーロッパに拡大
14世紀 ルネサンス	ペスト クマネズミの移動、蒙古軍の移動の後を追ってヨーロッパに拡大
15世紀 ルネサンス	梅毒 大航海時代以降蔓延。ルネサンスの性の解放で拍車

2.1 エジプト文明のトキソプラズマ症——紀元前3000年頃

紀元前3000年頃のエジプト文明では、猫の寄生虫を通じて人に感染するトキソプラズマが流行した。ここでの感染症は人にマイナス効果ではない事例がある。エジプト文明では彫刻や絵画に猫の絵が描かれており「女神バステト」として崇拝され「人類史の中で最も猫を愛した」と言われている。猫からトキソプラズマに感染すると、女性は社交的で世話好きになり、容姿に気を遣うようになるという。他にも反社会的になり、懐疑心が強まるなどの変化が起きることもあった⁸⁾。女神バステトは、ファラオ王の守護者、人間を病気や悪霊から守護する女神、多産のシンボル、豊穡や性愛を司る存在、「蛇の首を刎（は）ねる者」とされ家庭を守る存在として信仰された⁹⁾。猫を可愛がった古代エジプトの人々は、猫から感染したトキソプラズマによって、魅力や才能が増し、探求心や好奇心が刺激されると考えられた。この事例は感染することを、人々はプラスに捉えており、感染症への見方が少し変わるかも知れない。この時代にエジプト文明では『泳者の洞窟』（エジプト、約1万年前）や、『ウルのスTanダード』（イラク南部、紀元前2500年頃）の絵画が記録されている。エジプト文明の絵画の特徴は、絵具を写実的な使い方、日常の場面や風景を描く一方、宗教的な使い方として、埋葬や魔除け（金属、宝石と使用）、来世思想（死者の復活を願う美術が発達する）を描いている（『死者の書』紀元前1300年頃（エジプト第19王朝））。

8) 神野正史『感染症と世界史』宝島社2020年28頁参照。

9) 吉村作治『古代エジプトを知る事典』東京堂出版2005年「バステト」の項参照。

2.2 ペスト大流行とグレゴリオ聖歌（5世紀以降）

ローマ帝国から迫害を受けていたキリスト教が国教へ

ローマ帝国がディオクレティアヌス皇帝（在位284-305年）によって治められていた時代、キリスト教は迫害を受けながらも、圧制に苦しむ社会的弱者の人々の間に広まった。

迫害から逃れるため、キリスト教を信仰する者たちは、お互いが同じ信仰を持っていることを暗示させるため、カタコンベに入る際に魚のマークを用いた（今日ではクリスチャン・フィッシュと呼ばれている）。意味は「イエス キリスト 神の子 救い主」を意味するギリシャ語 ΙΗΣΟΥΣ（イエス）ΧΡΙΣΤΟΣ（キリスト）ΘΕΟΥ（神の）ΥΙΟΣ（子）ΣΩΤΗΡ（救い主）の頭文字をとって表わしている¹⁰⁾。この頭文字を並べるとギリシャ語で「魚」（イクスース ΙΧΘΥΣ）という意味になる¹¹⁾。迫害下にあったキリスト教徒を示すシンボルは「魚」であった。キリスト教の平等思想はローマ帝国の中で、民衆や奴隷といった弱者に受け入れられた。3世紀にキリスト教は迫害を受けても民衆に広まり、ローマ帝国は民衆が支持するキリスト教を利用する政策に転換していく。この頃、ローマ帝国は衰退期にあり、民衆を団結する必要もあった。キリスト教は徐々にローマ帝国内に浸透していく。313年のミラノ勅令によって、コンスタンティヌス大帝の治世でキリスト教はローマ帝国で公認宗教となる。この政策によってキリスト教は保護を受けるようになり、信徒、教会が増加していった。ローマ帝国の政情不安定と入れ替わるようにキリスト教は浸透したのである。キリスト教がローマ帝国で公認され、392年テオドシウス帝によってキリスト教はローマ帝国の国教と定められた。豪華な装飾で布教活動がはじまる。この時代のキリスト教絵画は、人物や建物などの対象物は思い切り「単純化」「図式化」され、物語の叙述に重点が置かれるのが特徴である。神の物語には、いつ、どこでという事実は必要ではなく、写実的は人物や三次元的な奥行きを表すことが目的ではなく、絵画は「見てわかる聖書」として布教に大きく貢献した。330年コンスタンティヌス大帝はローマ帝国の首都をローマからアジアとヨーロッパを結ぶ東西交易の要所であったコンスタンティノポリス（現在のトルコ・イスタンブール）に遷都し、ローマ帝国の政治・文化の中心は東方に移動する。ローマ帝国の遷都がビザンティン美術のはじまりとなる。

10) Ἰησοῦς Χριστός, Θεοῦ Υἱός, Σωτήρ（ギリシャ語小文字）

11) 「魚」とは、新約聖書でイエスが最初の弟子シモン・ペトロに会ったとき、ペトロはもともと漁師であった。ペトロにイエスは「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と告げられている（ルカによる福音書5章10節）。また、1498年に描かれたレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の絵画には、1977-1999年に行われた大規模な修復作業で、後世の画家の加筆修正が取り除かれてダヴィンチが描いたオリジナル絵画が明らかになった。そこには食卓に魚が描かれていた。

2.3 ペスト大流行の中で教皇グレゴリウス1世が典礼改革に着手

年代	広範囲な地域に及んだ感染症
6世紀 ビザンティン	ペスト クマネズミによる感染。長期の飢饉で栄養状態の悪化から人々の抵抗力が低下。東ローマ帝国を中心にイギリスまで広がり200年続いた。リンパ腺の腫れ、皮膚に斑点が出る。

392年にローマ帝国がキリスト教を国教とした影響もあり、中世においてはすべてがキリスト教によって統制されていた時代になる。政治、経済、学芸も、あらゆる活動がローマ・カトリックの教皇を頂点としたキリスト教の統制下にあった。この頃にペストがイタリアで大流行している。イタリアのローマ市に円形の天使城（Castel Saint' Angelo）がある。590年、時の教皇ペラギウス2世がペストで亡くなり、その後を継いだグレゴリウス1世（在位590-604）がこの城に天使が舞い降りたのを見て、ペストの流行が鎮まる合図であると予感したことから付けられた名称である。この治世にグレゴリウス1世がグレゴリオ聖歌のはじまりとなるきっかけをつくった。彼はカトリック教会の教化に努め、典礼改革に着手し、聖歌隊教育に携わるスコラ・カントールムの整備にも寄与した¹²⁾。グレゴリオ聖歌は8世紀のフランク王国カロリング朝のピピン（在位751-768）が王権の強化を視野にローマ教皇と関わったことから起こってきたものとされている。グレゴリオ聖歌の名は、聖歌の権威づけとされた面もある。正確な記録のあるイギリスでは、547年以降にも、664年、672年、679年、683年と繰り返しペストの流行があった¹³⁾。

当時、絵画は聖書の物語をビジュアル化し人々に伝え、敬虔の情を起こすように、音楽もまた教会での使用が許された。グレゴリオ聖歌は中世を代表する音楽になり、その音楽様式は旋律のみ、無伴奏の単旋律という特徴のモノフォニーの様式であった。教父アウグスティヌス（354-430）は、著書『告白』の中で、聖歌の使用を認めながらも、「聖歌の言葉ではなく、音楽に快楽を感じたら、わたしたちは罰を受けるべき罪を犯したのです」と記している。ここでは、聖歌が「歌詞」と「音楽」の二つの側面で分けて捉えており、歌詞の側面だけに価値が置かれている。これはグレゴリオ聖歌がモノフォニーとなる要因であった。つまりグレゴリオ聖歌は、神の言葉である歌詞に価値があり、歌詞をもっとも生かす様式として単旋律となった。また楽器は言葉をもたず、音楽的側面のみを強化する「悪魔の道具」として排斥される。そして複数の旋律からなるポリフォニーも退けられる。グレゴリオ聖歌のモノフォニーは単純で未発達なのではなく、神の言葉を伝える宗教的な目的にもっともかなったスタイルなのである。ヨーロッパの民族音楽にはポリフォニーがグレゴリオ聖歌以前にもあり、多声音楽は存在していた。モノフォニーであることは、多神教世界の民族音楽と差別化するのにも使用されと考えられる。

12) 片桐功（編）『はじめての音楽史』音楽之友社2013年24頁以下参照。

13) 加藤重孝『人類の感染症の歴史』丸善出版2020年34頁参照。

グレゴリオ聖歌の特徴

- ①中世頃までヨーロッパで学問を学ぶ者・聖職者の共通言語であったラテン語で、聖書からとられた歌詞を歌う。
- ②旋律のみ、無伴奏の単旋律、モノフォニーの様式。
- ③ネウマ譜という4線の楽譜に記載されている。
- ④女性修道院を除き、原則として男性と少年によって歌われる。

グレゴリオ聖歌が歌われる最も重要な儀式がミサである。ミサとは「集い」「集会」を意味し、キリスト教信徒が毎週日曜日に会う典礼である。それはイエスの「最後の晩餐」を再現、記念する儀式で、グレゴリオ聖歌がミサ曲として歌われる。次のような詩句がある。

「あなたの道を、主よ、私に示してください/主よ、あなたの憐みに私は望みをかけました/主に向かって私は歌おう/主よ、いつまで私に御顔をそむけるのか」

グレゴリオ聖歌は、キリスト教の布教や聖書の言葉を伝承するために作られた、という解釈もあるが、身分も財産も信仰も関係なく、どこから襲ってくるのか見当もつかず、人を恐怖と混乱に陥れた、そうしたペスト大流行の時代を経て成立した歌でもある。

人はなぜ歌うのか、その音楽の起源は紀元前3世紀頃とされている¹⁴⁾。英語の「音楽」musicの語源はギリシャ語μουσική（ムーシケー）とされる。ムーシケーとは太陽神アポロンに仕える九柱の女神ムーサ（英語Muse ミューズ）たちの技能芸術という意味。

ムーサたちはそれぞれ詩、歌、舞踊をつかさどり、女神たちの行為全体がムーシケーだった。音楽は詩、歌、舞踊などとまだ未分化で（祭儀）、そこから永い時間をかけて分離されていった。つまり音楽とは元来、女神たちが執り行う「技」であり、神的なものであったのである。音楽について世界で最も古い記録は旧石器時代の「祈祷」としての音楽である¹⁵⁾。また古くから「医療」のために音楽が使われてきた。音楽は神々や自然に願いを届け、また病気を治すための手段でもあった。祈祷師たちはまた「音楽家」でもあり、音楽は総合的なパフォーマンスでもあった。新石器時代から古代文明（ピラミッドやストーンヘンジなど巨石建築物が作られた時代）にかけては、音の高さに数理的秩序を見いだした。文字譜は紀元前3世紀、ネウマ譜（4線記号譜）は9～10世紀の記録が残っている。音程のはじまりは、ピタゴラス（BC582-496年）とされ、数学者ピタゴラスは、鍛冶屋で様々な金槌の音を聞いて、調和音程の振動数の整数比を発見した。音楽は元来、神々や自然に祈りを届けるものとしての存在であった。

14) 片桐功（編）『はじめての音楽史』音楽之友社2013年7頁以下参照。

15) 最古の音楽の記録は中央ヨーロッパのスロベニアから発見されたシベリを祖とするネアンデルタール人の笛とされている。43000年前の旧石器時代。また同じく旧石器時代にフランスのレ・トロワ・フレール洞窟からは弓のような楽器を演奏する音楽家の壁画が発見されている。

2.4 十字軍の遠征で感染拡大したハンセン病（11～13世紀）

美術年代	広範囲な地域に及んだ感染症
11世紀 ロマネスク	ハンセン病 熱帯の風土病が十字軍の移動でヨーロッパに拡大

ローマ帝国の拡大とともにハンセン病が広まった記録がある。皮膚の結節、硬化、目の異常など、外見に大きな影響を与える症状を引き起こすハンセン病は、らい菌の感染が原因だった。らい菌が発見されるまで、ハンセン病は神が与えた罰であるとか、遺伝性の病気であるといった差別や誤解が広がり、ハンセン病患者は偏見の目にさらされた歴史がある。ローマ帝国ではハンセン病患者が増加したため、キリスト教会は各地に「ラザレット」と呼ばれる患者を救済する施設を設置した。中世に入ってもハンセン病患者は一定数おり、教会や国家がラザレットを整備していた。

ハンセン病はヨーロッパ各地に感染拡大する。ヨーロッパにおけるハンセン病蔓延のピークは14世紀の十字軍に原因があった。十字軍は1096年に聖地奪回を目標としてフランス・ドイツ・南イタリアの諸侯が参加し第1回十字軍が結成され、1270年まで7回に亘って派遣された。十字軍の遠征により、ヨーロッパと東方社会の交流が活発化し、パレスチナ地方と往来したことが原因となり、帰還兵によりヨーロッパ各地でハンセン病が蔓延した。

13～14世紀に、ハンセン病患者はヨーロッパ全体で100万人の患者と1万9000ヵ所のハンセン病患者救済のラザレット、らい院といった療養所が設置された記録がある。キリスト教では旧約聖書のレビ記（13章14章）でハンセン病と思われる患者への対処方法（ハンセン病患者隔離）が記されており、新約聖書にはイエスが重い皮膚病患者を触るだけで治したという奇跡が描かれていることから、皮膚病患者を看護することが使命であると考えられていた¹⁶⁾。ハンセン病患者隔離は、キリスト教の教義に基づく宗教的隔離だった。患者の保護を目的に慈愛の心でターミナルケアを行うものだったが、患者はラザレットの中でその生涯を終えなければならなかった。この様相は、人々に「ハンセン病は隔離される病」、「恐怖の病」、暗い陰湿なものというイメージを深く刻み付けた¹⁷⁾。ハンセン病患者との結婚や相続を禁止する、都市から追放するなどの差別も多くあり、治療法が確立した20世紀になっても患者に対する偏見と差別が現在も世界各地に残り社会問題になっている。

16) 『新約聖書』、『旧約聖書』、中国やギリシャの古典、インドの宗教書『ヴェーダ』などには様々な病気が記載されている。例えば結核、ハンセン病、コレラ、天然痘、狂犬病、マラリア、肺炎、トラコーマ、インフルエンザ、ハシカ、ペストなど。

17) 森修一『ハンセン病対策の歴史と現状』日本ハンセン病学会雑誌2018年73頁参照。

2.5 ペスト（黒死病）大流行とルネサンス（14世紀以降）

美術年代	広範囲な地域に及んだ感染症
14世紀 ルネサンス	ペスト クマネズミの移動、蒙古軍の移動の後を追ってヨーロッパに拡大

これまでの世界史で、大量死の主な原因となった出来事について下の表にまとめた。人類が大量死した感染症の中でも、ペスト（黒死病）¹⁸⁾の影響が一際目立つ。

人類の大量死の主な原因（推計）¹⁹⁾

1. 感染症			
	スペイン・インフルエンザ	5000万人	1918～20年
	ペスト（黒死病）	7500万人	1347～51年
2. 戦争			
	第一次世界大戦	900万人	1914～18年
	太平天国の乱	数千万人	1851～64年
	第二次世界大戦	5000万人	1939～45年
3. ホロコースト（大量虐殺）			
	ナチのユダヤ人虐殺	600万人	1933～45年
	スターリンによる粛清	1200万人	1937～53年
	蒙古族による中国農民虐殺	3500万人	1311～40年

ヨーロッパでは農業革命が起こり、三圃制²⁰⁾が取り入れられ、イギリス、フランス、ドイツを中心に人口が増加し、都市に人が集中した。余剰作物を盛んに売買することでローマ帝国時代以上に貨幣経済が復活し、欧州の各港で交易が盛んに行われる中でルネサンスが起こった。人口増加で都市の衛生環境が悪化し、人間や動物の排泄物や生活ゴミが溢れ、ペストを媒介するネズミが大発生し、イタリアでペストが生じた。当時は疫病が神の罰として考えられていたため、ペストの流行に対して有効的な手立てを打つことが出来なかったカトリック教会の権威は低下した。人々はキリスト教以外に救いを求め、キリスト教以前の、古代ギリシャ・古代ローマ時代の書物や芸術への回帰運動が盛んになった。これがルネサンスの幕開けとなる。ルネサンスにより教会の権威から離れて芸術に革新が起こった。14世紀のペストの大流行はルネサンスという近世に

18) 皮膚が内出血によって紫黒色になることに由来する。感染ルートや臨床像によって腺ペスト、肺ペスト、敗血症型ペストに分けられる。ネズミが媒介するペスト菌により起きたものと考えられている。

19) 加藤重孝『人類の感染症の歴史』丸善出版2020年2頁参照。

20) 農地を冬穀（秋蒔き）・夏穀（春蒔き）・休耕地に区分しローテーションを組んで耕作する農法。農地の地力低下を防ぐことを目的に、休耕地に家畜を放牧し、その排泄物を肥料として土地を回復させる手助けとした。

突入する転換期になった。当時のペストがどのように収束したのかは明らかになっていない。一説では寒さのために菌をネズミに媒介するノミが死滅したと考える学者もいる。

① ルネサンス期の芸術の特徴

ルネサンス（再生・復活運動）はキリスト教カトリックの中心地イタリアにはじまる。

「自己の発見」…神の姿より、人間中心主義を表現するようになる。

- ・平面上に、数学的に正確な遠近法を取り入れる。
- ・解剖学の発達により筋肉を表現する。人間の力強さを表現。
- ・感情表現の豊かさ。心理学における男女の感情表現の違いを描写。

ルネサンスは絵画芸術の表現を宗教的に束縛した教会からの解放であったものの、それまでの絵画作品の多くの題材や描く場所を提供したのは教会だった。教会なしには現代に続くヨーロッパの多くの芸術文化は生まれなかったといえる。

ルネサンス期の多くの芸術家たちは神の姿よりも、人間の肉体や個人の顔、体、魂を表現するようになる。この世に1つしかない「自己」という意識に目覚めていく。

② 神より人間とは何かを追求した芸術復興ルネサンスの時代背景（14～16世紀）²¹⁾

13世紀までの中世ヨーロッパは、王侯貴族による封建社会やキリスト教カトリック教派の厳格な教義に縛られていた時代でもあった。画家は教会の装飾や聖書のビジュアル化として絵画を生み出すだけの「職人」として存在していた。15世紀に入ると、フランドル地方で油彩技法による写実的な絵画が誕生した。顔料と乾性油（空気中で固まる油）を使った油絵具が使われるようになる。西洋絵画の本格的な発展は、同じく15世紀にイタリアの商工業都市フィレンツェにおけるルネサンス（再生の意）運動から始まる。

ルネサンスの「再生」の意味とは、人間精神の自由を謳歌したギリシャ・ローマの古典文化の復活を目指したもので、自然科学の進展を伴い、レオナルド・ダ・ヴィンチなどによって新しい絵画表現が生まれた。ルネサンスはイタリアの商港都市ヴェネチアからフランス、ドイツなど各地に広まった。優れた画家は工房を構え、多くの弟子との共同作業で、新しい美を求める王侯貴族や教会、富裕市民の注文に応じていた。

21) ヨーロッパ史で、ルネサンスから宗教改革以降の歴史を「近世」という。ビザンティン（4世紀～）、ロマネスク（10世紀～）、ゴシック（12世紀～）は中世。

本資料を作成する上での参考文献：樺山 紘一『ルネサンス』（世界宗教大事典）平凡社1991年P2057、『ルネサンスの人と文化』日本放送出版協会1987年、『ルネサンス』講談社学術文庫1993年、森田義之『名画への旅（5）初期ルネサンス（1）天上から地上へ』講談社1993年、『名画への旅（6）初期ルネサンス（2）春の祭典』講談社1993年。

③ ルネサンス美術からの革新

美術（fine arts）とは視覚的芸術を指し、視覚によって捉えることを目的にしている造形芸術の総称である。主にルネサンス期から取り入れられた技法について概観しておく。

- ・ 人間的規模：ゴシック時代は、神権政治の影響で教会の高さを競い、教会のための芸術が中心であった。それに比べ、ルネサンスの芸術は現実的となる。つまり人間らしさ、等身大の人体の美しさが注目された時代になる。
- ・ コントラポスト：壁や支柱に頼ることなく二本足で立っている像のこと。ドナテルロ（1386-1466）は、ギリシャ芸術最大の達成の一つであるとされるコントラポストを大成する。人間の肉体のもつ美しさ、魅力を再生した。服の上からでもしっかりとした肉体が感じられ、人体を動くことのできる構造体としてとらえた。教会建築の装飾としての像が少なくなる。
- ・ スフマート：レオナルドが発明した「ぼかし技法」のこと。薄く溶いた絵具を何回も塗り重ね、微妙で柔らかなぼかしをつくる。レオナルドの言葉「ものに輪郭線は存在しない」を解決する技法となる。実際にモナリザの頬や背景に使われている。空気中の光の屈折による色の変化で遠近法を表現する空気遠近法の表現に使われた。

④ ルネサンス期の代表的芸術家

芸術（art）とは、表現者あるいは表現物と鑑賞者とが相互に作用し合うことで、精神的、感情的な変動を得ようとする活動（文芸、美術、音楽、演劇、映画）のことである。ルネサンス期の代表芸術家として、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』（イタリア サンタ・マリア・ディレグラツィエ教会食堂）や、ミケランジェロの『ピエタ』（サン・ピエトロ大聖堂）といった作品がある。この作品は、ローマ教皇に依頼された彫刻である。イエスが磔に処せられた後、そのイエスを聖母マリアが抱いている姿の彫刻。ミケランジェロの最高傑作と言われている。またミケランジェロの『最後の審判』（サン・ピエトロ大聖堂に隣接するシスティーナ礼拝堂）は400人以上の人物が描かれた大作で、製作期間は5年かかったとされる。全裸の人物を多く描いたために教皇庁から着衣させるよう修正を求められた。芸術の多くは、カトリックの教皇庁の援助がなくては成しえなかった。教会を建築するのも芸術作品を制作するのも、人々の心を魅了するという目的は同じであった。ゆえに教会は優れた芸術家を求めた。

2.6 ルネサンス期の梅毒の流行（15世紀）

美術年代	広範囲な地域に及んだ感染症
15世紀 ルネサンス	梅毒 大航海時代以降蔓延。ルネサンスの性の解放で拍車

1493年にヨーロッパで細菌を病原体とする梅毒（性感染症）が流行する。梅毒の流行源は現在も特定されていない²²⁾。同時期のルネサンス運動は、近代文化の基礎が確立され、人間の性の

22) 梅毒に感染すると皮膚や筋肉、骨などにゴムのような腫瘍（しゅよう）ができる症状になる。感染した女

解放でもあった。性の解放に奔放なルネサンス期の気運が、梅毒拡大の背景になった。また度重なる戦争によって、兵士の多くが休戦時に娼婦と性交渉し、梅毒をばらまく要因となった。梅毒が性感染症であることが判明すると、ヨーロッパでは、ルネサンス期の奔放な性文化が衰退していき、キリスト教を中心に、性をタブー視する文化が急速に広がっていった²³⁾。それは15～16世紀カトリック教会のカノン（教会法）が理論的に発展にも影響を与えた。カノンとはカトリック教会の制定法で、信徒の信仰および行為の規準を教会が独自に定めたものである。その内容は、自制心を養い心の自由を得ることにある。人々の聖化（七つの秘跡：洗礼，堅信，聖体，ゆるし，病者の塗油，叙階，婚姻の定め），聖書と聖伝の解釈規定，信者の権利義務などが定められている。また婚姻について，離婚は認められない。民法の上で離婚して再婚した場合には教会法で重婚とみなされ罪とされる。聖体拝領を受けられない。教会の審判（前婚の絆の解消手続き，無効宣言手続き）が必要となった。

レオ10世（在位1513-1521）の時代に，ローマ教皇庁は財政危機に陥る。サン・ピエトロ大聖堂の修復工事のため，ローマ・カトリック教会は莫大な費用が必要になった。そこでローマ教皇は，費用を捻出するため，免罪符を発行することを許可する。免罪符とはローマ・カトリック教会が発行した「罪の許し」を表す証明書で，これを購入することで罪が許されると人々に説いた。

ペストが蔓延し，感染症は以前から「神から与えられた罰」とも考えられていたため，常に「死への不安」を抱える人々は免罪符を買い求めた。それだけペストの恐怖心が凄まじかったことが伺える。1347年にはじまったペスト流行は，ヨーロッパ全土に波及し，全人口の3分の1から4分の1の命を奪ったと言われている。

2.7 死をモチーフにした絵画が流行

ルネサンス期にペストが流行したことでヨーロッパでは身分に関係なく死が訪れ，踊りながら墓地（死の世界）へ導かれていく様式の絵が美術界で重要なモチーフにもなった。『死の舞踏（ぶとう）』ミハエル＝ヴォルゲムート（1493年）がその特徴である。何の前触れもなく襲う感染症の死は，人々の恐怖心を駆り立て，美術にも影響を与えたのである。

こうした時代の中で，キリスト教がヨーロッパ各国で国教となる一方，このキリスト教国教化による「保護」がローマ・カトリック教会墮落の要因にもなった（免罪符の販売など）。そこで，宗教改革がはじまる。ドイツで1517年にM. ルターが主導となりプロテスタント教派が誕生する。その主な特徴は3つある。1.聖書のみ（キリスト教絵画を教会から排除した），2.信仰のみ，3.万人祭司説を主張。ルターはこれまでヨーロッパの公用語であったラテン語聖書をドイツ語に訳し

性から産まれる胎児は，生後数年ですい臓，脾臓の増大，発熱，肺炎といった症状がでる。1492年に新大陸に到達したコロンブス船団の乗組員が，先住民女性との性交渉し現地の梅毒に感染しヨーロッパに持ち帰ったとの説が有力視されている。16世紀では現在使用されていない療法として，水銀療法が用いられ沈静化した。1564年，世界で初めてイタリアの解剖学者ファロピウスが性予防の目的でリネン鞘（さや：sheath）をコンドームに使用。1671年には牛の腸膜が使用された。

23) 神野正史『感染症と世界史』宝島社2020年77頁参照。

た。ドイツ語を母語とする信徒は母語で聖書が読めるようになった。ルターは、キリスト教絵画は聖書に基づかない作者の思想にすぎないとし、キリスト教に関する宗教画を教会からすべて排除した。ゆえにプロテスタント教派の教会内はキリスト教に関する絵画はなくなり、聖書を自らが読み、聖書から自らの信仰を深め学ぶことをすすめた。当時すでにドイツ人のヨハネス・グーテンベルクによる活版印刷技術があったため（ラテン語聖書は1455年2月23日に印刷開始）、瞬く間にルター訳聖書はヨーロッパに広められ、プロテスタント教派を広める成果にもなった。そこで、カトリック教派は、プロテスタント教派から信者を奪い返すために、これまで以上にキリスト教信徒が、さらに感動する音楽や絵画を画家に製作をさせ、莫大な費用を芸術分野に投資をし、新しい芸術を生み出す結果となった。それがバロック様式のはじまりにもなった。日本には1549年ザビエルが来日をしているが、彼はカトリック宣教師である。本来ならば年代はプロテスタント教派が来日するはずだが、ザビエルは宗教改革の波を受け、カトリック信徒を増やすためにアジア伝道を行ったのである。こうした芸術活動がバロック様式誕生させ、カトリック教派は再繁栄する。カトリックの教会が新興のプロテスタント勢力から信者を奪い返すには、感情に直接訴える芸術が必要だった。こうした背景から誕生した芸術様式がバロックだった。

プロテスタントに対するカトリック側の政策：聖職売買の禁止、宗教裁判所を設置（異端の取り締まり）→禁書目録を作成（思想統制）

バロックとはポルトガル語の「ゆがんだ真珠」（バローコ）が語源で、激しい動きや明暗の強いコントラストを特徴とする。その先駆者がカラヴァッジョ。カラヴァッジョは、リアリズムと官能性を絵画に求めた。強烈な光と影で激情的な表現を描いた。バロックの手法は宗教画や宮廷絵画にも取り入れられていくようになる。教会の腐敗と王侯貴族の権力を誇示する芸術が誕生し、それがバロックとロココの時代（17～18世紀）となる。

芸術家と教会の関係

5～4世紀 中世 教会の下に聖書内容 を描く「職人」	15世紀 ルネサンス ギルド（工房組合） の「芸術家」徒弟制度： 親方に認められなければ 仕事できない。	16世紀 宗教改革 芸術家は職を失い、イ ギリスなどで肖像画 の制作が盛んになる。	17世紀 バロック 国王の下に芸術家 上層市民のための芸術家
----------------------------------	--	--	--------------------------------------

1600年頃からカトリックの教皇が中心となる宗教的世界と、国王が支配する政治世界は分離され、宮廷に豪華なバロック芸術が栄えるようになった。

3. おわりに

新型コロナウイルスが世界で広がる中、過去の感染症の歴史から、キリスト教芸術を概観した。これまでの人類史で、最も多くの方が亡くなった出来事として、感染症では1918年に生じたスペイン・インフルエンザで5000万人の方が亡くなり、戦争では1914年に起こった第一次世界大

戦で、900万人の命が奪われた。2022年7月31日現在、新型コロナウイルス感染症で、世界で亡くなった方の数は約640万人と報道されているので、実は第一次世界大戦によって、人が人の命を奪った数のほうが、はるかに多かったことがわかる。

中世を代表するキリスト教音楽であるグレゴリオ聖歌が制作しはじめる時代背景はどのような社会であったのか。それは決して華やかなものではなかった。5世紀、あらゆる活動がローマ・カトリック教皇を頂点としたキリスト教の時代に、ペストがイタリアで大流行していたのである。一日で1万人の死者が出たと言われている。グレゴリオ聖歌は、キリスト教の布教や聖書の言葉を伝承するために作られた、という解釈もあるが、身分も財産も信仰も関係なく、どこから襲ってくるのか見当もつかず、人を恐怖と混乱に陥れた、そうしたペスト大流行の時代が始まりとなった歌でもあった。こうした時代背景から、そこには神への救いのみでなく、平穏な日々を取り戻るようにという人々への平和の願いが込められているようにも感じられる。グレゴリオ聖歌は、そののち、ローマ・カトリックのミサなどで歌われるようになる。

人はなぜ歌うのか。歌は、古代から人が神々や自然に願いを届ける手段でもあった。キリスト教はそのルーツであるユダヤ教と同じように神を賛美し、歌うことを重視してきた。祈りは歌へと通じ、旧約聖書の中の「詩編」は、祈りとして指導者と会衆が交互に歌う形で朗唱する習慣がはじまりであったとされる。その詩編90編の12節に、次のような歌がある。「生涯の日々を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように」。感染症が蔓延する中、日々のニュースでは感染者と回復者を数え、死者を数え、重症者の数を数えている。しかし、この詩編は、それとは別の数を数えるように勧めているのである。私たちは、人生のすべての日々を価値あるものにする数え方を学ぶべきではないだろうか。その姿勢は、古代からの歌に表された「生きる知恵」を学び得ることができるだろう。

世界の様々な出来事を過去の歴史や芸術文化から学び、その時代に私たちと同じ人間は、どのような暮らしや価値観の中で生きていたのか、比較文化という研究の視座を通して、現代へのメッセージを考えていきたい。